

へんてこどくご

謡犬 ユネ



へんてこどくごの いろいろ

「詩菓子屋」の たどるさんは、
真面目に不思議な、詩作の日々。
そんな彼には、ヘンテコな幼馴染が
いました…

彼らの日常的・非日常的な、思いや散歩
そんな色々、どんなかな？



「たどろさん について」



「おいしい？ここのは」

この箱で
書いた詩を
削ると...



さくほろっの、
「詩菓子」になる





詩菓子を売る
私の露店に、

名の無い子が
つまみ食いに通った



夢遊をもいって
ミューとつけた
謎めく初めての友達



名のとおりの
日々の変身
初めて見た種族だった



で、詩の味は
どうだい？

うん、
餡子





「とりかご」









「おねだり カルザさん」



「おん魚の名前は キヌさん」





「むやうの宵と」



おや...今夜は
また一段と



「夜の中の、一人一びき」





「へんてこポスト前にて」





「呼応の二者+わんっ」



「のっそり需要を供給」

いい泉があつて
中でつい転寝をね…
救出ありがろうはぐっ



風呂焚き、
しんどっ…



そんなたどるに
未知の素材を
アゲルよ。



「詩葉子の、うれゆき」





「いんちきあにまる☆らんど」



●透明ライオン

昼はお昼寝、夜はそうっと
歩き回ります。
おどろかさないのであけてね！

●雨粒ゾウ

普通の雨粒の形を
した、ゾウさんです。
ほんとだゾウ！

●ミニキリン

小さすぎて、虫眼鏡
ではみえないよ。
let's try!

●音クマ

音だけで存在する
クマさんです。
何か聞こえるかな？





「たどるたちの すむところ」

→ 私達の住まう星は
こうであるらしい



夜、特にミューのいる夜は
周辺の生物・土地すら
奇妙に変化していく。



戻らぬものも、いる

そんな変化から戻るものも



未知の混沌と
発見をもたらすミュー

では 果たして
私はなにであつたろう
なにになってゆくだろう





「今日もまた 詩菓子屋さん」





「into the お気に入りカン」





「あっ」

十！な！ニ！カ？
それならばっ

夢の中に
行ってみるかい？

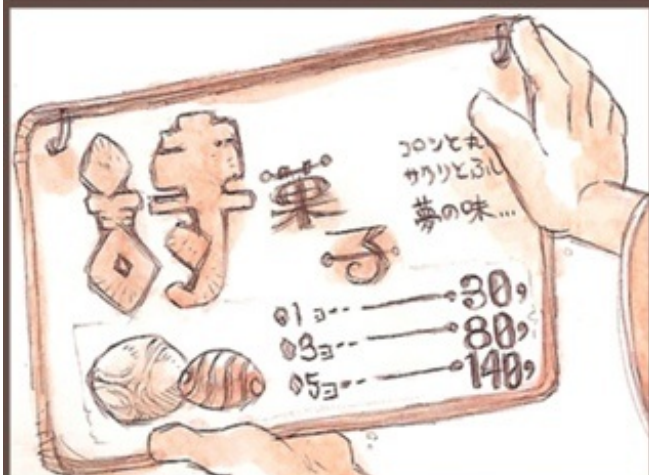
何やら
聞き覚えが

詩がみえれば喜洋洋
見出す力が磨ければ
それもまた
ではウフフいざ！





「少し、変わりました」



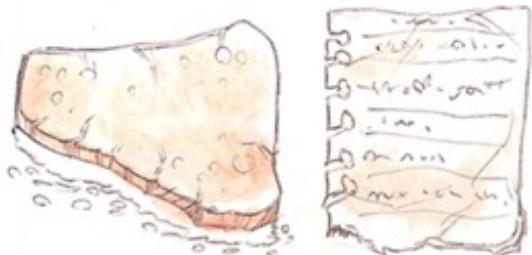


「二対と いっぴき」

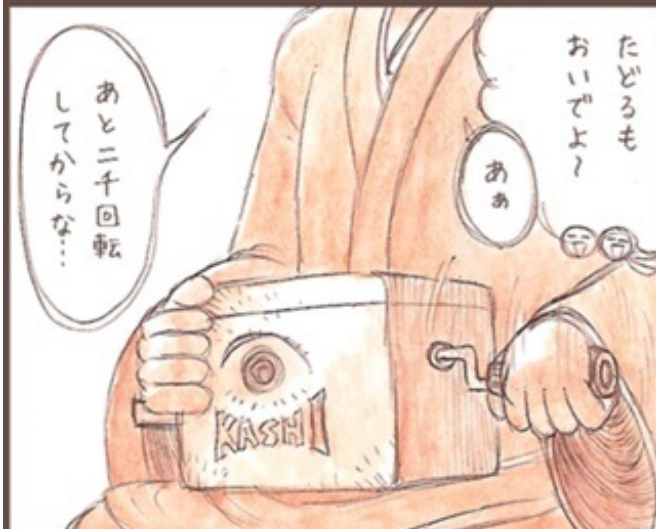




「風ふかば…の ズックラッ」



「私の出来ることは」





「ツインたんこぶ」



「なるがために、の orz」

夜ごと
に飛び
文や荷
を風に
放つ

私の投函する
ポストは



私もそれくらいに
ならねば...



それには
やはり体力向上
が必要だ

よしっ！



「青くみえやすい　さんぎょ」





やあ 初めまして!
ポエモルは
味を選べる
詩菓子!

素敵な夢と
選べる甘や
どちらも
エンジョイしてね☆



どんな味に
なったかな...



あ、
おじさんも?
おいしいよね
ポエモル!

ああ...

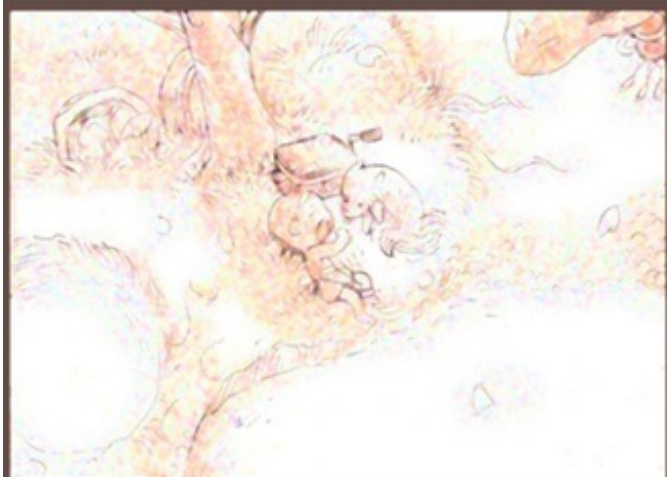






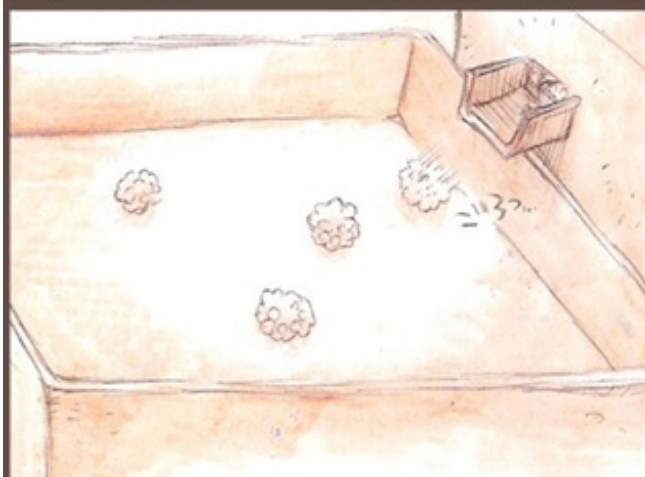
「私の姿は 明滅していた」

言葉も 姿も
かよわく かききえ
風まくなか 砂のゴト
何時か透明になり
見えぬ者になると
ひとと私も
そんな気のする
ようだった





「夢なる木を みる」





「ツプの 造り繰り」

今日はまだ
三千ツプ前後ある



ツプが余れば、行動を選べる
詩菓子道具も 新調できる



ありすぎたら、
迷うという
だがなくなれば、
つらい
ツプと人…
いつからだろう



そういえば
ツプの味は
どんなだろう？

勿体なくて
試せない

「わんこも できるもんっ」





「たどるさんの くおりあ」



坂を下っていると
思い出す歌がある



スベサ スベサ ドムザレコ
ガウイ アズガザチ オドレシエワ
マイゲロア ナプステイニ

野で拾った謎の詩葉子
ずうんと響く歌だった



あ、
二木ベツの
びんだっ！



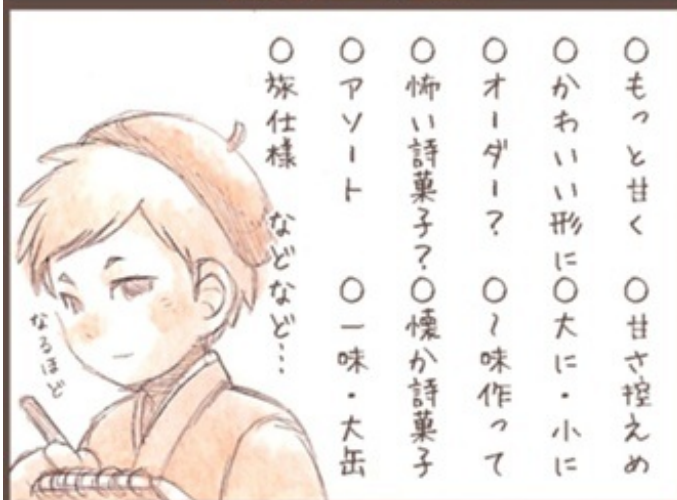
スベサ スベサ
ドムザレコ...

ああ止まらない
そして胃腸がっ

キユーってっ



「多様と、選択」





「金魚の 青くなさげなところ」





「素材と かたち」





「土に小さき殻のある日」



「なれてきた？宵」



「けんぎょ キヌさん」

キヌは古家を
買ったとき、
庭で遊んでいた

仔犬魚 一匹で
それからずっと
うちにいる



絹毛、大歯と絹糸
けんぎょに來鳴く

名とはふしぎで
日に日にキヌは
更にキヌになっていく



この仔が私の頭上
にて憩うのは

祖先が流氷に吠える
大海獣だったからミ

なんて、空想してみる



「すっとこ想い」

あなたいつも

お着物

ねえ

簡易版です

長く着ると楽で



これも帯の

ようですが、よく

伸びるのです

そしてぬくもる



熱？気をつけて

さあ巻けたよっ

ふっ



ご両親にも？

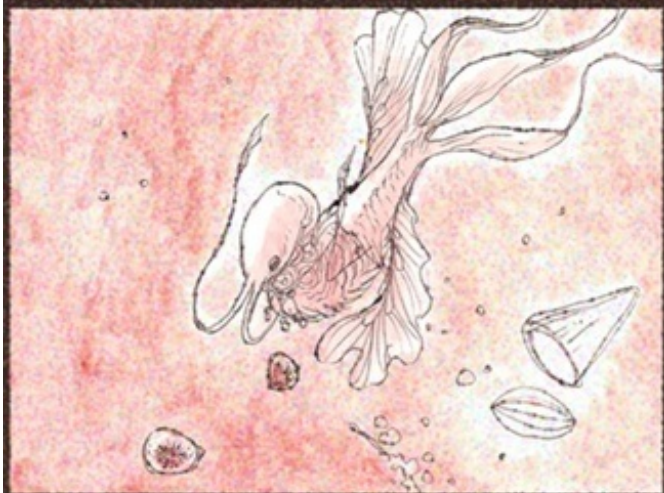
あらまあ

こんな事しか

できませんので...



「金魚の流浪」





「衝撃カルガさん」





「こどくが一粒の泡なら」





夢の中 宇宙から
菓子への賛辞が届いた



喜び向かい 会った星人は
見上げるほど巨大化し

手繰りの糸が
絡みついた



うまく 舞うどころか
ただ歩むことも ならず

かたく解けぬ糸ごと
誰という事なき鉄が



ひびもなごみも
林檎にどにか似ている。



「その むこうには」





「月とキヌさん」





「きんぎょの ぽか〜ん」



「夜寝り」



道に迷った先で
歌の詩葉子を
買った



「詩人は詩の眼あらばこそ
月も影も 飛翔する

私は弦楽と歌で
君は夢枕を箱で」



「いつしか君は、
そを見るだろう」

「もとと かたち」



「なんだ、夢かあ」

おおっ？

ああ 何だか
長い夢を
みていた
気がする

早く二人に
朝餉の支度をせんと



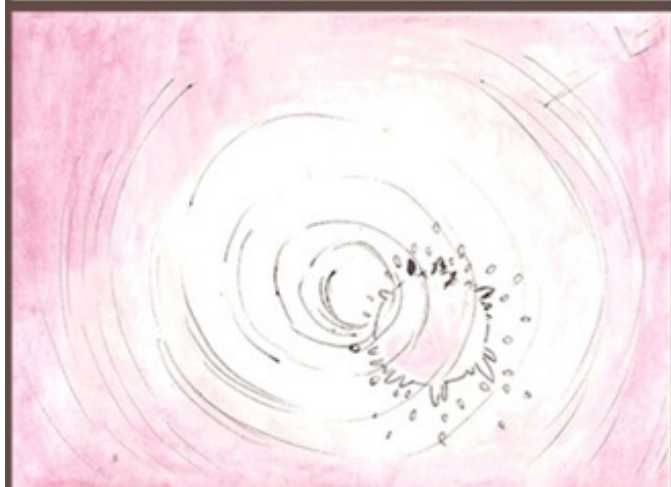
やあミユー
早いね

なんだ まだ夢か
も、またひとつ。

「その 眼の 奥に」

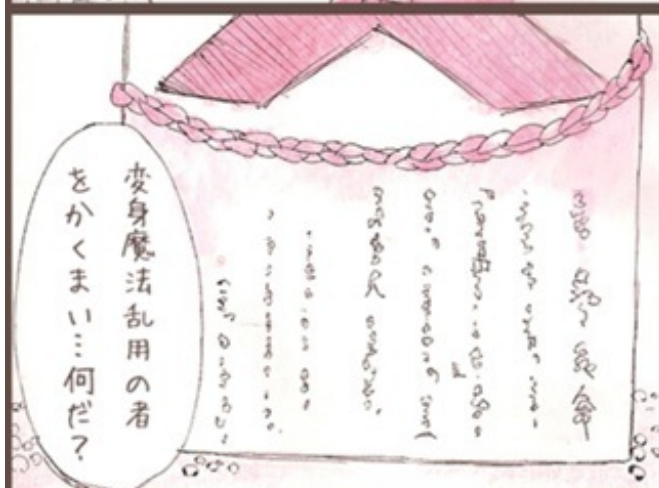
その箱は

ずっと手元で
何かを見ている



茶と味噌煮け色。

「ふいに もぐもぐ」





「変化と心配」



「店やかば 魔域まで」

野の道端に、
秘密の店を開いた



いらっ
しゃいませ



千ミねえ？
だ？みだって
いったでしょお

ヒイさん
どうも

いっさい私は
怪しげな悪の売買など
していないのだ
それを信条に、
私は詩葉子を削り
また訪れる人々に売る
事を止さなかった
それにしても…



魔域から私たちは
どう帰ってきたのか…

「こんつめと さくれつ」



どうも眠れず
光った言葉
継ぎ合わせて
深夜...



キヲのまじろむところだけ
やわらかくぬくもる



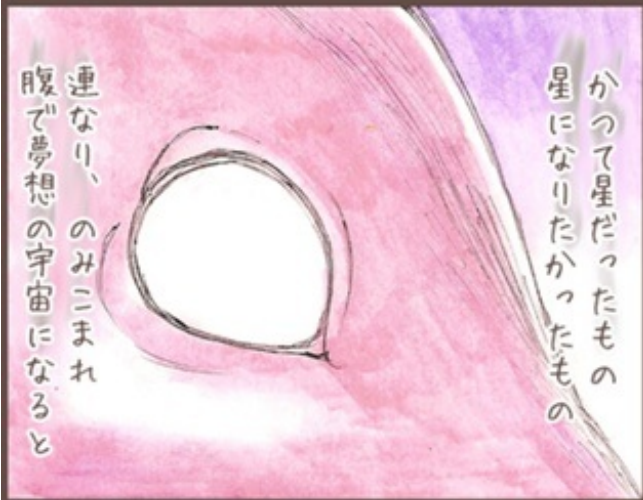
作りたての詩葉子は
ほぼ全てはいけた

「ホシクイ」



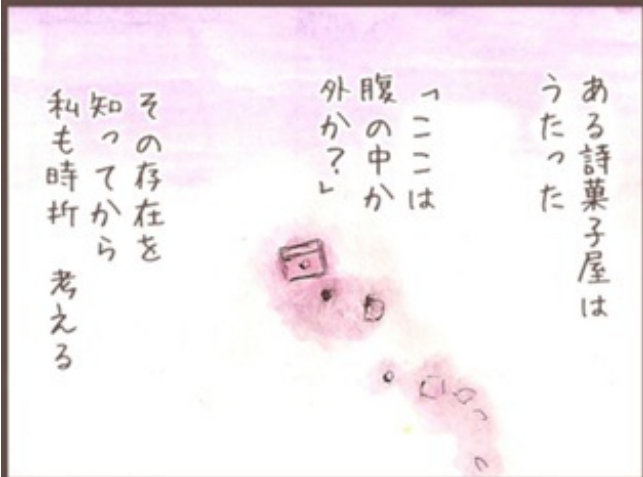
空のどこかに、
大魚が棲むという

泳ぎ回って
星々を呑むような



かつて星だったもの
星になりたかったもの

連なり、のみこまれ
腹で夢想の宇宙になると



ある詩菓子屋は
うたた

「こころ」は
腹の中か
外か？」

その存在を
知ってから
私も時々考える



それはともかく
「私」は「こころ」に
いる、詩菓子屋だ

「思惑めたもろず」



「うつろうものたち」



その日は、
あらぬところに
宵の明星が出た

「願い箱屋」



“さあ
どうだい
悪魔の魂
封じ箱
磨いて
待てば
願い事
音楽
鳴る間に
運ありや
叶う!”



観衆が笑い
去った後には、
仮面
“おっと…
あんたは本物
持ってるね”
嬉しげに消える、
声



帰宅後箱に
耳をあてると
謎の脈動が
聞こえた。

「すがたと、ニころ」





「葉なる樹の うたごえ」

戸惑いが
無かったといえ、
うそになる



でも

自然と子守歌が
その支えだった



“もつとつくるんだ”
“詩人になって
伝えにくるんだ”

魂を駿馬にする術を
二人は私に 風と吹かせた



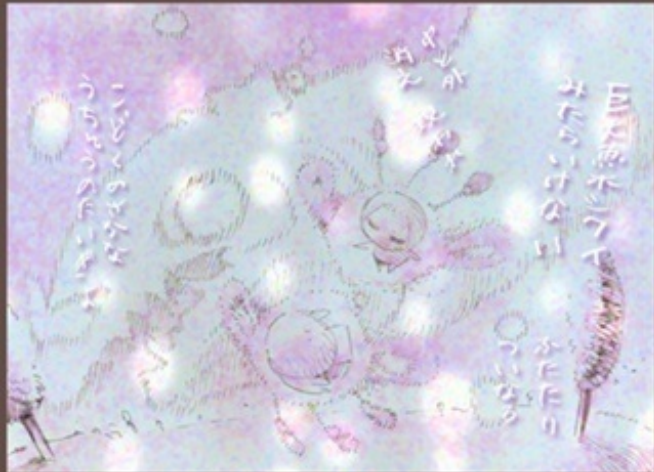
影は比べ得ぬもの
なれど...

ミューの放浪には
それすらも 許されぬらしい





「夢懷古と魚群」



「発動の さざなみ」

寝起きに何かが始まっていた。



おお
どうした箱っ

よしよし…
そう暴れるな
壊れてしまうよ



こんな事は今まで
無かった…
ミューは分かるかな



…ミュー？



「夢遊の宵 だからこそ」





箱が動いたんだ
何か気になって
歩いてた

僕も
ザヨ



僕は姿変わる
僕がいると 周りも

最近急に
それが気になる
気になると
もっと変化して
その分何か忘れてく



僕どこかに
目的があったのか
それともただ
魚のお化けか...?



おうミュー
ありがとなっ！
俺の巣今すげえ
広々DX状態だぜっ

「木と星とろず」



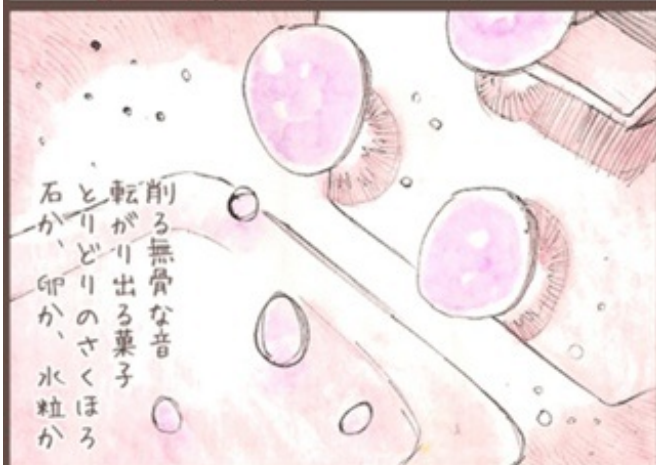
「詩菓子をつくる こと」



帰り道
ろんで見つけた
甘い香りと異彩
放つ 結晶



雑多な言葉
浮沈する
ココロの海
強く気になる名
あつめ、えらび、
もとづき、えがく



削る無骨な音
転がり出る菓子
とりどりのさくほろ
石か、卵か、水粒か



深くあいおう人々は
なぜだろう

懐かしげで、愉しげで
そしてどこか、停げに物思ふ

「よびごえに よばれる」

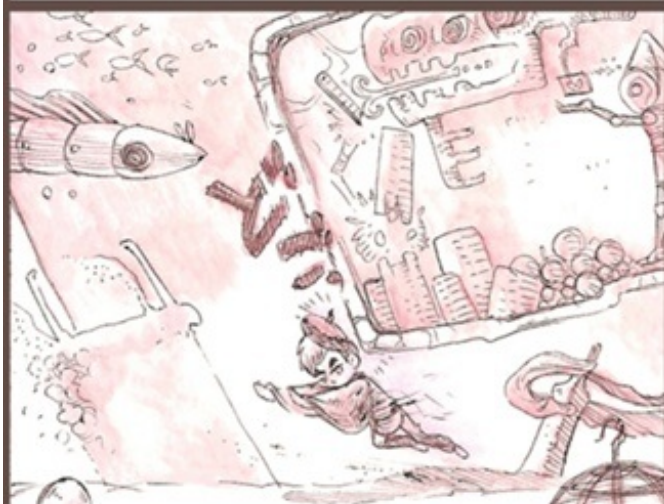
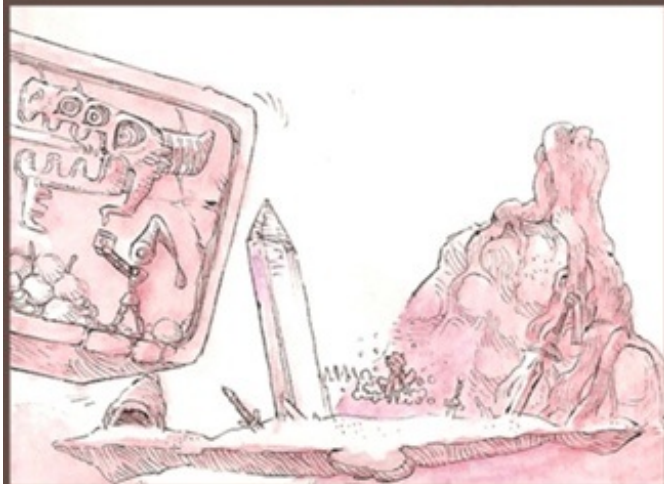




「ホシクイの発現」



「古代の記憶の断片」



「どくどくで もっこう」



「にぎの、”かし”」

よっ たどる
君も迷子？

そんなところだ
あちこちの魚に
葉子をやってきたよ

さ、帰ろう
遠道そうだが

ありがトウ たどる
僕や箱に名前と意味を
くれて

AKASHI

だから、互いに
証でいられた
存在の、ここらの
星の

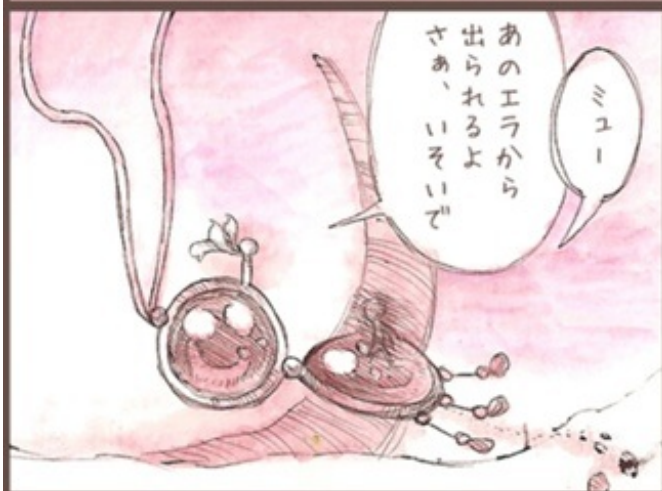
僕はそれを持って
孤独なホシクイの
証となってゆくよ

お別れだ、たどる
君が家なる星に
帰れるうちに...

お星
だまて...

だまて...

「かえること かえらないこと」



「ルミンのうた」



「帽子屋根の家の詩人」(☆)





ここまで読んで下さり、ありがとうございました！

なんだろうと、解けない謎を不思議がるコロ
そのひとのなかの、昔馴染みのような事物・イメージ
ヘンなもののもつ独特の きになるぽいんつ

そして、ホシクイのこと
(後半を描き直し&やや唐突になってワタツ)

うかべつつ・おもいつつ 描きました。

...おや、お話びとず3人から、ごあいさつがあるようです。



カルゴさん：でさあ、結局俺達どうなったんだろ～

俺かんじんなときに置いてけぼりだしっ

でも、俺だけまた歌の詩菓子貰ったからいいや！

魚とベレー帽も帰ってきたしな...



ミューさん：いやあ しんぴの小宇宙 魚体ですなあ～

僕は今その外でも中でも、ふりーだむに

めたもるできれば、あとさくほろ出来れば幸ですよ

ハッ では ずっと幸？イツミラコー！



たどるさん：いやはや、とけない謎解きのような思考で申し訳ありません。

人は皆 どこか孤独なのかもしれません。

でも、だからこそ、と立ち上がり旅歩むのも大事だし、

そのものがなしさをそっと なでつつ物思うときも 要るのやも

中か外か これからも、詩作と散策を続けて参ります。

おやっ キヌも さかんに尾を振って挨拶しておりますよ。

それでは、次の365でお会いませう！ファイ&ゆるっ

へんてこどくご まとめっ

<http://p.booklog.jp/book/79830>

著者：謡犬 ユネ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuneutainu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79830>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79830>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ